

# 小田原史談

第 8 号

発行所 小田原史談会  
小田原市幸一丁目  
郷土文化館内

## 特 輯 号

### 春の史跡めぐり解説

中 野 敬 次 郎

#### 解 説 要 項

- 一、小田原文化財の宝庫長興山
- 二、満開の枝垂桜を見る
- 三、春日の局と稲葉氏一族の豪華な墓石
- 四、名僧鉄牛和尚の寿塔
- 五、長興山遺品
- 六、石垣山に一夜城址を訪う
- 七、太閤一夜城の規模
- 八、名刹湯本早雲寺の北条氏関係の遺品

#### 一、小田原文化財の宝庫長興山

小田原市入生田の長興山はもと牛臥山と言って、部落の北に十四丁許り登ったところに一丈程の大石があって牛が臥しているのに似ているので伏牛石と呼ばれて山名がこれから生じた。今から約三百年前の寛文九年(西暦一六六九年)に、小田原城主稲葉美濃守正則が山を開発して黄檗宗の大寺院である長興山紹太寺を建立したので、その山寺号が直ちに山名となって長興山と呼ばれるようになったのである。稲葉正則がこの寺院を建立したのは父母の冥福を祈るためであって、父の小田原城主稲葉丹後守正勝は諡号を古隠紹太居士、母の正勝夫人の諡号を長興院心伝妙安と言ったので、この法名に因んで寺名を長興山紹太寺と名付けたのであった。

ところが稲葉正則は長興山を開発する三十五年前の寛永十二年(一六三五)に父母追福のため小田原城下山角(十字四丁目)に麟祥山紹太寺という寺院を明よりの帰化僧木庵禪師を招じて建立していたのであるが、後更に木庵の勧誘に従って牛臥山の幽邃地を開発して山角町の寺院を移して一大禅林の建立を行ったのが寛文九年の長興山紹太寺で、開山第一世に黄檗宗大本山の山城宇治の万福寺から鉄牛和尚を招聘したのであった。

盛時には寺域東西十四町七十間余、南北十町十六間余あって黄檗宗関東第一の巨刹で、この広大な寺域に、大門(総門)本堂(本尊阿弥陀如来、大雄宝殿)書院(清淨観)鐘鼓楼、藏経閣、禅堂(心空堂)齋堂(法喜堂)開山堂(慈昭堂)稲葉氏霊屋、布袋安堂座、地藏堂(円明殿)楼門(天王殿)一吸亭、扇面亭、開山鉄牛和尚寿塔、稲葉氏一族の墓などが随所に配置せられた。また、三百六十級の石段、通玄路の丘碑、永喜捨の碑、橋貞風狂歌碑、貞徳翁狂歌碑、弁財天祠、牛臥石、筆架石などあり、また、川涯、心潭、青蛇、白象など名付ける清流があり、琵琶池などあって、これらが全部残っていたならば、近隣無双の遺跡の集合地とも言おうべきところであったが、幕末の火事で建物が殆んど焼け、旧寺域の大半が柑園麦田と化して桑畑の変入感を深くするが、なお貴重な遺跡・遺物が残っており、次々と発見されるものもあるのだ、小田原文化財の一宝庫というべきところである。

#### 二、満開の枝垂桜を見る

枝垂桜はヒガンザクラの一種で、枝が延びるに従って下垂するのでシダレザクラと称せられ往々各地に存在するが、本樹のような巨木で由緒のはっきりしているのは県下でも稀であるので昭和三十二年三月小田原市天然記念物

指定として愛護することにしたものである。樹高約十四米、目通幹囲二米六十五種で、發育完全に樹勢旺盛、八方に枝を均衡に拡げ、枝垂桜の模範の形態を整えているので、開花の頃は洵に美麗で遠望偉容である。普通の桜より一週間早く開花するので、史跡めぐりの当日は満開であろう。

天然記念物指定の際に専門家の鑑定で樹令三百年から二百五十年と推定されたが、その後、小田原城主稲葉美濃守正通が延宝五年に書いた「たかね日記」を見たが、その中に長興山紹太寺建立の次第を述べておいて、文中に「春を忘れぬ形見にとて桜など植えしも十とせあまり過もてきて、古きかげとぞなりにける」と書いてあって、紹太寺建立のとき桜樹を植えたことが明かであるから、この枝垂桜もその時植えたものの一本であろうから、寛文九年の建寺が今から三百年前であるので、この記録から考えて樹令は専門家の推定とも一致する古木である。この地はもと諸木鬱蒼として幽邃を極め珍不奇石が多かったが、今その大半が失われて荒廃した。けれども、幸に本樹が、伐採をまぬがれたので、存在洵に貴重である。

三、春日局と稲葉氏一族の豪華な墓石

稲葉氏一族の墓所は入生田部落より約七百米北に入った長興山(二〇九米)の中腹にあって三百六十級の石段を登って達する。墓所は東西二〇・一米南北九・二米の長方形の地を東西北の三面を低い石垣で区切り、南が正面で石段を登って入るようになっており面積一九四平方米あって、そこに左の八基の二米半から三米に近い堂々たる墓石が南面して東西に並立しているのは一偉観である。正面向って左より

○稲葉美濃守正則の墓(位牌型、二・二八米)

(表) 潮信院殿前從四位侍從兼美濃守泰成元如大居士塔  
(裏) 越州高田城主從四位下侍從兼丹後守稲葉氏越智宿禰正通、元祿丙子九年九月初六日敬立

○稲葉丹後守正勝夫人の墓(五輪塔、二・四九米)

(表) 長興院殿心妙安大師寛永三年十一月廿日  
(裏) 正保二曆八月二日稲葉美濃守正則造立焉

○稲葉丹後守正勝の墓(五輪塔、二・八〇米)

(表) 寛永十一曆正月念五日養源寺殿古隠紹太居士  
(裏) 為稲葉丹後守正勝公同美濃守正則造立焉

○春日局の墓(五輪塔、二・八二米)

(表) 麟祥院殿彌了大姉 寛永二十年九月十四日  
(裏) 為春日御局正保二曆八月 日稲葉美濃守正則造立焉  
○稲葉美濃守正則夫人の墓(五輪塔、二・四九米)  
(表) 正岩院殿天室智鏡大姉 寛文四甲辰年五月廿日  
(裏) 賢妻大江姓毛利氏富女之塔 小田原侍從稲葉美濃守正則立

○稲葉丹後守正通の継室の墓(五輪塔、二・四九米)

(表) 龍智院殿珠光元明大姉 寛文十庚戌年七月十二日  
(裏) 稲葉丹後守義雅公継室持明院大納言基定公女 寛文庚戌秋七月十有二日 藤原姓清姫の塔平干武城之第同十三日葬花栄邑相州小田原城(数字欠損)

○稲葉美濃守正則の長兄の墓(五輪塔、二・三一米)

(表) 梅嶺宗春童子寛永二年正月廿九日  
(裏) 正保二曆八月二日稲葉美濃守正則造立焉

○塚田木工助正家の墓(五輪塔、水輪失われてなし、一・七八米)

(表) 高節宗勇居士寛永十二年正月廿五日  
(裏) 正勝公之内侍前塚田木工助正家

○稲葉氏は寛永九年(一六三二)から貞享二年(一六八五)まで、丹後守正勝・美濃守正則・丹後守正通の三代五十余年小田原城主であった。

この一族の八基の墓石のうち、春日局・丹後守正勝・正勝夫人・美濃守正則夫人・正則の長兄・正勝侍臣塚田木工助正家の六人のものは正則が造立したもので、美濃守正則と丹後守正通継室の二人のものは正通が造立したのである。

また正則が造立した六人の墓は、墓石に刻せられた造立年号でも明かなように、長興山紹太寺が建立された寛文九年以前のものであるから、同寺がなほ山角町にあった時に造立せられたもので、同寺の長興山への移転とともに墓所も改葬せられたものである。

春日局は丹後守正勝の実母であり、稲葉氏の栄達は局を背後とする力に負うことが大であるし、また正勝の子美濃守正則は幼少の時に母を失い、祖母の春日局に養育されて成人したので、稲葉家一族は局を尊崇すること極めて篤く、この墓石も追福のために造立したので、本墓でないが齒髪の一部をここに埋葬したと伝える。局の本墓は江戸湯島の天沢寺である。

丹後守正勝と夫人とは遺体を江戸湯島の養源寺に埋葬されてあって、ここ二基は美濃守正則が父母追福のために後に造立したものであるので、遺体の一部を遺品と併せて改葬したものらしい。

正則夫人は最初からここに葬られた。しかし正則隠居して家督を正通に譲った後に稲葉氏が封を越後高田城に移されたのを甚だ遺憾として死に臨んで小田原の父母及び夫人の側に葬るよう遺言したので、一旦は高田城下の牛頭山弘福寺に葬ったが、間もなく遺体を小田原長興山のこの地に送納して墓所を築いたのである。

正則の長兄は名を千熊と言ひ幼童で没したが、早世しなかったならば家督を継いで小田原城主たるべき人であったので、弟正則がこの点を考慮して父母と同格の墓石を造立したのである。「新編相模風土記」にこの墓を「正則の幼男の墓なり」と記したのは大変な誤りである。墓石に「梅嶺宗春童子、寛永二年正月廿九日」とあるが、この童子の没年の寛永二年には正則は年令三才であるから、子息がある筈がないので、この童子は正則の子供ではなく、兄の千熊のことである。

正通の継室の遺体もここに葬られてある。この墓石に稲葉丹後守義雅と刻してあるのは、正通は初め義雅と称したからである。

塚田木工助正家は丹後守正勝の侍臣で、主君没後一周忌に追福して殉死したので、その高節を称して一族の墓地に並べ葬ったのである。

#### 四、名僧鉄牛和尚の葬塔

稲葉氏一族の墓所の東五十米ばかりの所にあつて塔の高さ二・六五米あつて基壇、基礎の上に台座を置き、その上に大きな塔身を据えているが、塔身は表面を平たくした円形で、その表裏に左の文字を刻し、塔は全体に斬新で重量感を持っている。

(表) 開山上鉄下牛機老和尚寿塔  
(裏) 貞享丁卯七月廿六周申吉辰

#### 第二代法嗣門人超宗格造立

鉄牛和尚は長興山紹太寺の開山第一祖である。稲葉美濃守正則が小田原城主となつた初頃に高僧木庵禪師が招かれて久しく小田原城下に滞留しておつた。木庵は黄檗宗本山の山城国宇治の万福寺の開山隠元禪師の高足で、本山第二世になつたし、黄檗宗紫雲派の祖ともなつた人物で、隠元と同様に中国よりの帰化僧であつたが、小田原滞在中に稲葉美濃守正則に協力して、小田原城下山角町に麟祥山紹太寺を建立させ、後に入生田牛臥山の幽邃に日をつけて更に正則にすすめてここを開発し、山角町の紹太寺を移して長興山紹太寺を造らせた人物である。木庵禪師は後に宇治の本山に帰ることになつたの

で、弟子の鉄牛を代りに立てて稲葉氏の招きに応じて小田原に下らせ紹太寺の開山とさせたのであつた。

鉄牛は初め臨濟宗の京都大徳寺の大竜禪師に参禅し、後に黄檗宗本山万福寺に入って同山第一世隠元に参禅し、第二世木庵に師事し、寛文九年師の推挙によって小田原に下向して長興山開山となつた。後に紹太寺を二世超宗如格和尚に譲つて小田原を去り、関東各地を巡錫して、今の千葉県香取郡東莊町小南六九〇番地にある福聚寺に於て、元禄十三年八月廿日七十二才で歿したので、墓は同寺にある。正徳二年の歿後十三回忌に朝廷より大慈普応禪師の号を追贈された高僧であつた。

この寿塔は貞享四年鉄牛禪師が長興山紹太寺開山として年令六十才に達したとき門人で第二代法嗣であつた超宗和尚(法名如格)が、師の健康を祝福して長寿を祈つて建立した寿塔である。

#### 五、長興山遺品

○鉄牛和尚画像と鉄牛和尚血書

稲葉氏小田原城在鎮の頃の長興山紹太寺は関東第一の黄檗宗の巨刹として繁栄し、その宏構は頗る東海道上下の旅行者の注目を引いたが、有名なケンパルの「日本旅行記」の中にも、元禄四年彼がオランダカピタンに随行して長崎から江戸に上つたとき三月十日の午後箱根を越えて入生田を通つて紹太寺を見た記事掲げ「インウタ(入生田)は又他の一村にして村の左側にチータイジ(紹太寺)と呼ぶ宏壮なる一字の寺あり、境内の敷地は方形の石にて畳めり、敷地の一側には、美わしき噴水あり、また敷地の一側に金字を掲げる額あり、これに近く石造の寺門ありてチートサン(長興山)と称し、同じく金字をもてこれを記せり」と述べてある程である。今その繁栄當時をしのぶところの遺品として逸品なるものに右の二幅の画がある。鉄牛和尚の画像は筆者は北浜明で、絹本彩色の大幅で、老後の高僧鉄牛禪師の風格が洵に生けるが如く画かれていた名画である。

鉄牛和尚の血書は、伝えによると、和尚が左腕を刺してその血をとって描いたものと言われ、実母十七回忌を管むために、血書して経巻を書写し、余りの血で阿弥陀如来の座像を写したのであるが、その血書の如来像が残つてゐる。書写の九十日後には最初の創瘡が跡方が癒えた言われ程に不眠不食して一念に冥福を修したという。血画の弥陀像は血痕或は薄く或は濃く、或は暗黒色に或は褐色を帯び、襟を正しさしむる感がある。鉄牛は絵も上手

であつたらしい。この二幅の絵は今の紹太寺（入生田三）三番地住職武内永昌氏）の所蔵である。

○長興山開発者供養塔

今の紹太寺の堂裏の荒れた墓地から最近発見されたものであるが、長興山開発の状況をしのぶことの出来る貴重な資料で、墓石一本、高さ二・一米、幅〇・五七米の石の角柱で四面に文字が刻されてある。

一側面に「当山開關総奉行梅原源五衛門、鈴木勘右衛門。小奉行田中治左衛門、奥津三郎兵衛、山田治郎右衛門、加藤伝左衛門、小田市郎兵衛、生間権左衛門」とあるが、これは寛文九年に長興山を開発するときの工事総奉行と工事小奉行八名の稲葉家藩士の氏名である。他の側面に「勞力士休僧衆」として四十三名の僧侶の名が刻してあるが、この土木事業に僧侶までが多数労役奉仕に出動していたことが明かとなった。また表面には「無縁塔。三界万霊」とあつて、その下に十五名の院号が刻され、碑の裏面に「功德主。相州岩村住朝倉清兵。法名心岳惟空敬言」とあつて、この墓塔は、開発土木事業に直接當つていた石工頭梁の岩村の朝倉清兵衛が、その配下として働いた十五名の無縁仏を供養するために建立したものであるが、十五名の無縁仏こそ工事中に不慮の禍にあつて死んだ土工達であることが推定できる。この墓塔の発見によつて計らずも従来知ることの出来なかつた貴重な長興山開発資料が得られた訳で、十五名からの犠牲者を出しているところから察すると、開発のための土木工事が大規模で且つ難工事であつたことが知り得られる。

#### 六、石垣山に一夜城址を訪う

石垣山は古くは山名に定称がなく、笠懸山（大三川志、関八州古戦録）とか松山（太閤記、豊鑑）とか西の高山（北条五代記、鎌倉九代後記）などといろいろの名称が古記録に見えるが、天正十八年（一五九〇）小田原征伐の際に豊臣秀吉がこの山頂に本営として宏大な石畳によつて石垣城を築いたので、これ以来石垣山と呼ばれるようになった。山の高さは約二百五十五米である。

さて、この石垣城を石垣山一夜城とか太閤一夜城と言うのは、秀吉が一夜の間に築き上げた城郭だと伝えられておつて有名であるが、これは「小田原記」や「関八州古戦録」などに記明しているように、「初め山頂の密林の中に陣營の扉や櫓の骨組を作り、その上に杉原の白紙を張つて白壁を塗り上げたように見せかけ、一夜のうちに樹木を伐採したので、夜明けて小田原城中

の将兵が、忽然として現われた城を仰ぎ見て驚愕し、一夜のうちにあのような山頂に高々と白亜の巨城を築きあげた太閤秀吉という人は、天魔の化身であらうと言つて恐れをなしたと言ふ意味から一夜城と称せられるようになったので、実際の築城には、天正十八年四月五日頃から開始して六月二十六日に完成しており、その間八十余日を費し、築城動員人数は四万人に及んでいる。

秀吉は四月九日頃すでに石垣山に本陣を移して、小田原城攻囲の十五万の大軍を指揮しており、七月九日小田原城落城して七月十四日小田原を出発して奥州に向つたが、帰路に八月十七日再度一夜城に入り、五日滞在して八月二十二日京都に向つて発路したから、通算して百余日この城に在留していたのである。

この間に、愛妾淀君が多数の侍女を従えて六月二十日に一夜城に到着し、七月九日小田原を立てて淀城に帰るまで五十二日間滞在して秀吉と起居を共にした。このとき秀吉の第二側室松ノ丸殿、第三側室三ノ丸殿、第五側室大納言殿も淀君と同行して石垣山に来ており（第四側室加賀殿は病体のため来なかつた）、千休以下有名な茶人も多数秀吉に随従して淀君や從軍諸將との間に城中で盛大な茶会を催した。徳川家康・前田利家・上杉景勝・北畠信雄・宇喜多秀家・羽柴秀次などの参戦武将も常に当城に伺候したし、小早川隆景・島津文保・大友吉純・吉川広家などの参謀幕僚は手兵を率いて一夜城の内外に駐屯していた。五月十四日に相馬義胤、五月廿七日に佐竹義宣、六月九日に伊達政宗などの北関及び奥州の大諸侯が相繼いで当城に來つて投降しておる。

また京都からは四月十七日に本願寺法主光佐、五月六日に築紫広門などの使者が來つて秀吉の起居を候し、皇室からは勅使権大納言勸修寺晴豊が遣されて秀吉に宸翰を賜つており、右大臣今出川晴季、権大納言中山親綱、鳥丸光宣も勅使と同行して一夜城に來つて秀吉の安否をたづねた程で、天正十八年の四月から七月までの百日間は石垣山上に天下の政庁と幕府が置かれた感呈した。

一夜城は小田原戦役の時のみに利用された秀吉の本営として築かれた臨時の築城であるが、規模雄大堅固で、その上に本丸、二ノ丸、三ノ丸、天守閣、諸曲輪など城郭としての構造が皆備つていて堂々たる永久的城郭をなしている点に全国に類のない大きな特色を持つている。

堅牢な石畳を高く積んで築く所謂「石垣城」は安土桃山時代（信長・秀吉

時代)に完成した築城法で、石垣山一夜城はこの「石垣城」なるものの初期のものであるが、小田原戦役後には全く利用されず修理も加えられなかつたので荒廃し、また江戸時代の度々の地震で石垣の崩壊した面も多いたにもかかわらず、大体の当時の形態が残っており、一体全国に残る石垣城の多くは、築城時代が古くとも、その後の居城の大名によって修正改造が加えられているものが殆んどあるが、一夜城のみは天正十八年築城当時のものが一切修補も改築も加えられていないから、「初期石垣城」の遺構としては天下一品の価値を有するのである。

小田原戦役の際に榊原康政が陣中から西国に留守居中の加藤清正に送った書翰の中に、一夜城のことを述べて、「上様御陣へ西ノ高山ノ頂上十餘丈の置石ヲ築キ箱根山連穿雲、敵城直下被御覽候。御屋形造様ノ広大成有様、凡聚落大阪ニ難劣相見へ候。其他一手々々構陣城、天守矢倉白壁瀧天陣屋々々悉塗籠、小路々々割堅横、陣所へ大将ノ意業々々相見へ候」とあって、結構の美と規模の雄大なことがわかり、秀吉の雄図を察することができる。

一夜城は江戸時代には小田原藩主が管轄したが、明治初年官有となり、同五年払下げとなって小田原宿代官町宮川徳右エ門買収し、更に明治九年小田原十字町松岡仁右門これを買収した。今も松岡家の所有である。

昭和三十四年五月十三日、文部省の史跡として指定された。指定面積の一万余坪で、指定地は小田原早川梅ヶ窪一三三番地ノ一、一三三番地ノ一二、一三八四番地ノ一〇二。所有者は松岡宏明、松岡シンの二人に分れてい

七、太閤一夜城の規模

大関一夜城の築城は型式の上から言って「平山城」で、構造上から「石垣城」である。本丸の標高二五・五米、天守台が二五八米地点にある。

明治初年書かれた実測記録によって規模を記すと、城は地形に応じて東西に長く南北に短かき長方形で、大手を南面に置き、東面に搦手を設け二の丸以内は悉く高い石垣で囲んでいる。

★本丸。長さ五十間、横三十八間、石垣の高さ六間或は七、八間、其の南に巾五間、東に巾三間の二門がある。

★天守台。本丸郭内の西北隅に存する。長さ十八間、横八間

★二の丸。石垣惣内通り折廻四百五十四間。惣外通り折廻四百九十四間、石垣高さ南方九間、西方八間、東方八間、北方三間。また二の丸内に五個の

曲輪と一個の櫓台。三の丸に一曲輪がある。

★帶曲輪。本丸の疊郭は二の丸郭内の北西に接近して築かれているので、西方本丸と二の丸の中間に東西に細長い帯状の曲輪を生ずる。長百三十四間、巾三間或は八間。

★西曲輪。天守台の西外面と二の丸郭との間に南北に長く存するもの、長さ四十九間、巾八間。

★南曲輪と厩曲輪。本丸と二の丸との二個の正門を結ぶ道路の西側にある。南曲輪は石垣の長さ十三間、横五間。厩曲輪の石垣は長さ八十一間、横十八間。

★井戸曲輪。二の丸東方に存する井戸を囲む郭、長さ十三間四方ある。

★角曲輪。二の丸の西内外側にある曲輪で、石垣がW字形の陵角を持っていてるので角曲輪と呼ぶのであろう。長さ二十間、横十間

★櫓台。二の丸の井戸曲輪の北側にあつて、陣鐘を掛けたところであるのでお鐘の台とも言う。長三八間。横八間、

井戸曲輪は土人の俗称に「さざえの井戸」「化粧の井戸」など呼ばれているが、曲輪の中央に存する井戸は二の丸の平地から九間低いところにあるが、螺旋形の石垣道路を降って達するようになっていてるので「さざえの井戸」と言われ、また淀君の化粧水を執ったところであると言うので「化粧の井戸」の名が起きた。この外、井戸には馬冷しの井戸、朝日の井戸、夕日の井戸などがあり、また城の内外に銃炮台跡、源太屋敷跡、上人畑、聖屋敷、古城跡(大森・北条時代の城址)などの多数の遺跡がある。

八、名刹湯本早雲寺の北条氏関係の遺品

早雲寺は北条氏綱が大永元年(一五二二)に父早雲の菩提寺として建立したので有名であるが、以前ここに真覚寺(恐らく古義真言宗)という古寺があったのを氏綱が再興したもので、京都紫野大徳寺の住職宗清以天和尚(大隆禪師)を招いて開山第一世とし、臨濟宗とし金湯山早雲寺と称したのである。天文十一年後奈良天皇の論旨を賜って勅願寺となり、北条氏の頃は寺域東西二十八町、南北二十町に及ぶ巨刹として繁栄したので、今も小田原北条氏に關係する遺品宝物が多量に存在して北条氏研究の第一の宝庫である。

○北条氏三代画像。北条早雲、北条氏綱、北条氏康の三代画像で絹本彩色三幅。作者は不明であるが何れも北条時代に描かれたもので特に早雲画像は

文部省指定の重要文化財である。

○北条氏五代画像。北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代画像で、絹本彩色五幅。作者は土佐法眼光起で、早雲寺十八世聖宗の讃がある。寛文年間北条伊勢守氏治の寄付したもの。

○北条氏政寄進の文机と硯箱。文机はたて一尺六寸六分横一尺八寸七分、硯箱はたて七寸横六寸一分、高さ一寸四分、鎌倉時代の作品と言われ、製法極めて巧緻で特に机及び硯箱全体に張られた布は「早雲寺切れ」と言われて有名である。二点とも文部省重要文化財指定。目下東京博物館に寄託中。

○後奈良天皇勅書。天文十一年二月、以天和尚に大隆禪師号を賜わりたる時の勅書である。勅、地傑人靈、鬱々法林之種、草創巨禪、古赫々精藍之声華、宗清和尚早透機関、專涉学海、一喝一棒、威於乾坤、三要三玄、比徳於山岳、天上衆星拱北、益見列位焉、世間諸水趣東、又貴朝宗矣、禁闕達聽、金湯躍名、特賜正宗大隆禪師。天文十一年二月三日。

○後奈良天皇論旨。天文十一年六月早雲寺を勸願寺とせられたときの論旨である。当寺為勸願之淨刹、致仏法紹隆、宣奉祈皇家之再興者、天氣如比、仍執達如件。天文十一年六月廿四日。左大弁。早雲寺大隆禪師禪室。

○北条氏歴代真筆古文書。北条氏の早雲以下の歴代太守及び一族の真筆古文書が多数あるが、特に早雲寺が越前勝山城の小笠原左衛門尉に与えた四葉の書翰は早雲真筆中の逸品である。

○竜虎の襖絵。本堂の須弥壇の両側にある大襖絵で雄渾な水墨画である。寺伝には狩野法眼元信筆という。この種のもので県下で最も優れた作品の一つである。

○元徳二年銘の梵鐘。天正十八年小田原戦役の際に、秀吉の本陣石垣山一夜城内に陣鐘として掲げられたもの。もと三島市の三島山法華寺(豆州国分寺)にあったものを秀吉軍箱根山越の際に持ち来ったものであるが、陣後秀吉より早雲寺に寄贈された。元徳二年六月五日の銘が刻されている。

○北条五代の墓。寛文十二年八月十五日従五位下北条伊勢守平朝臣氏治再建と碑背に刻されているので、この墓石の以前に北条時代からの墓石があったことが知られる。五基の墓碑の表面に左の文字を刻す。

早雲寺殿大岳瑞公大居士。俗名伊勢新九郎長氏。永正十六己卯年八月十五日。春松院殿前左京兆快翁活公大居士。北条氏綱。天文十辛丑年七月十九日。

大聖寺殿前左京兆東陽岱公大居士。北条氏康。元龜二辛未年十月初三日。慈雲院殿前左京兆勝岩傑公大居士。北条氏政。天正十八庚寅年七月十一日。松巖院殿前左京兆大円徹公大居士。北条氏直。天正十九辛卯年十一月初四日。

○北条幻庵作庭園。本堂背後の庭園で有名な北条時代の文化人で茶人であった幻庵(北条早雲の第三子、本名長綱)の作と伝う。近年本堂の改築の際に併せて庭園も修復した。園内に京都釜の作者で有名な辻与次郎の作になる天正六年銘の鉄灯籠がある。この外同寺には北条関係以外の遺品も多数存在する。

第八号

昭和三七三年三月一五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ヶ月三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙発行委員会  
発行所 小田原市幸一丁目  
郷土文化館内  
小田原史談会

<p>御料理仕出し 御弁当</p> <p><b>株式会社 東華軒</b></p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>純良医薬品</p> <p>株式会社 <b>オダワラ薬局</b></p> <p>錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華</p> <p><b>松屋</b></p> <p>小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>松風 銘菓 千代菊 甘露梅 銘菓(県指定の店)</p> <p>電話 2376</p> <p><b>集栄堂本店</b></p>
--	---	--	---

<p>平野商会</p> <p><b>平野久雄</b></p> <p>小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真</p> <p><b>イガラシ</b></p> <p>小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器</p> <p><b>江島屋</b></p> <p>小田原箱根口 電話6602</p>	<p><b>志澤</b></p> <p>TEL3131</p>
---	---	---	---------------------------------

<p>株式会社</p> <p><b>小田原百貨店</b></p> <p>社長 神戸英次郎</p>	<p>明るい生活 楽しい読書</p> <p><b>八小堂</b></p> <p>小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 大雄山線 運営事務所</p>
--	---	--	--------------------------------------

<p>あなたの洋品店</p> <p><b>はふや</b></p> <p>小田原幸町 TEL2307</p>	<p>小田原信用金庫</p>	<p><b>きそば庵</b></p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗</p> <p>小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	----------------	---	---

<p>高級陶器の店</p> <p>小田原市緑1~103 小田原銀座通り</p> <p>株式会社 <b>江島屋陶舗</b></p> <p>TEL(0465)5427</p>	<p>梅露衣 月の衣</p> <p>小田原駅前 <b>正栄堂菓子舗</b></p> <p>電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店</p> <p><b>花田屋</b></p> <p>小田原銀座2 電話3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う</p> <p><b>カメラの光輝堂</b></p> <p>小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
---	---	---	---

<p>便利で 楽しいお買物は</p> <p>小田原駅前</p> <p>Ⓢ <b>箱根登山デパート</b></p>	<p><b>箱根登山鉄道株式会社</b></p> <p>電話小田原(0465)4111</p>	<p>西洋料理 御土産各種</p> <p><b>あさひ</b></p> <p>小田原駅前 TEL2680・2681・3051</p>
--	---	--

